

「一流になりなさい。それには、一流だと思ひ込むことだ」という本からです
人財になり、人財を創りなさい。そのために人生観と死生観をもつことから始めなさい
毎年夏、アラスカへ出向きます。アラスカの大地で、グリズリー、つまりヒグマの写真撮影をするためです。川辺は信じられないほどの鮭で埋め尽くされます。生まれて二年後、彼らは間違いを犯すことなく、故郷の川に帰ります。滝を越え、グリズリーの攻撃を乗り越えてボロボロの魚体を一所懸命揺らして、一途に故郷の川、産卵すべき場所を求めてくるのです。いったい何のために？ 答えは単純です。子孫を残すためです。身が朽ちようとしている雌鮭は、産卵のための静かな川面を探して、やがてジッと身をそこに置くのです。雄鮭が、数十頭の群れで、雌鮭を取り囲みます。一瞬の産卵の、その瞬間のためです。鮭たちの生命の最後のきらめきがアラスカの夏を美しく彩るのです。数時間後、川辺は息絶えた鮭の死骸で埋まります。やがて、川へと還り海へと流されていきます。何万年と続く生命の連鎖を知るひとときです。人間はなぜ、生殖年齢を過ぎても、なお長い生命の時をもつのでしょうか。それは、子孫に自分の生き様を残すためだと思ふのです。ある意味では、誇りを継承してほしいからこそ、自分の生き様を残そうとするのでしょうか。人間の生命は有限です。永遠の生命を願う人はいないでしょう。いつかは必ず消える自分を思うとき、せめて誰かの記憶のなかに自分の面影を残したいと人は願うのです。限りのある生だからこそ、限りない生き様を残したいと切に願うのです。「自ら人財になり、人財を創ってほしい。そのためにはね、自らが仕事に命をかけ、部下に仕事に命をかける大切さを知ってもらうことだ」仕事とは、確固たる人生観を体得するためにある。そして人間は、生きる意味、正しい生き方を知り、実践するために生きるのではないか？ いつ頃からか、そう思うようになりました。ともに夢を語り、一つの大きな事業に歩みだした若い経営者を、突然の病で失ったことがきっかけだったのかもしれませんが。私がアドバイスしたその事業は、大きな夢へ向けて動きだしてはいましたが、いまだ成果に至らず、苦闘している最中のことでした。兄のように私を慕ってくれて、自宅にも遊びにきてくれる、とても優秀な経営者でした。何より、その人柄が大好きで、私だけでなく、誰からも好かれる好青年でした。彼と語る夢はとても楽しく、夢とロマンを共有している、そう確信できる親友だったので。アドバイスをし、歩みはじめたその事業。いまだ成果に至らず苦労をさせていたその事業が、若い彼を突然の死に至らせたと思えました。発病して、ほんの数日後の死でした。通夜、そして葬儀の間中、彼の遺影と話をしていました。ずいぶんと長い時間、彼の死の意味を考え続けました。「すべては必然なんだよ。そして、彼は素晴らしい人生をたくさんの人に残してくれたのではないかな」冬の日差しが春へと、はっきり変わる頃。私のなかでは、いまだ理解できない、解決できない悔悟や悲しみ、怒りや悔しさが渦巻いていました。突然涙が流れている自分に、ふと気づくことができました。船井先生の言葉が、頭のなかに染みていきます。「君は彼からすごく大事なことを学んだんだ。周りの人も同じだ。確かに悲しいだろうし悔しいだろう。でもね、人生は長短ではなく、何を残せたか？ 誰かの心のなかに何を残したのかが大切なのだよ」とても大きなこと。どんなときも、自分の可能性を裏切らない。誰に対しても、苦境にあっても変わらない笑顔でいる素晴らしさ。何よりも、多くの人に、人間はその生き様を財産として残しうるのだという事実。「人財に君自身なりなさいよ。そして人財をたくさん創ることだ。そのために、人生観、死生観をもつことが何より大切だ」そのことを教えてくれているんだよ。さまざまな出来事は、君に何かを教えるためにやってくる。学んで振り返って、正しい生き方をみんな学んでいくのだよ。どんなことも、自らを磨く砥石である。本当にそう思えます。そして、人間は後の人たちに勇気を与える生き様を残すためにも生きているのだと、いま心から思えます。人間の生は素晴らしい。そして何よりいまの生を、ひとときを大切に生きるのだと、心から語れるいまを、多くの人たちから教えられたのだと思えるのです。

多くの人に、人間はその生き様を財産として残しうるためにどのような人になれと言っていますか？

()